



# 地磁気世界資料解析センター News

## 1. 新着地磁気データ

前回ニュース (2019年3月27日発行、No.174) 以降入手、または、当センターで入力したデータのうち、オンラインデータ以外の主なものは以下のとおりです。

オンライン利用データの詳細は (<http://wdc.kugi.kyoto-u.ac.jp/catmap/index-j.html>) を、観測所名の省略記号等については、観測所カタログ (<http://wdc.kugi.kyoto-u.ac.jp/catmap/obs-j.html>) をご参照ください。

また、先週の新着オンライン利用可データは、(<http://wdc.kugi.kyoto-u.ac.jp/wdc/onnew/onnew-j.html>) で御覧になれ、ほぼ2ヶ月前までさかのぼることもできます。

### Newly Arrived Data

(1) Kp index : (<http://wdc.kugi.kyoto-u.ac.jp/kp/index-j.html>) (Mar., - Apr., 2019)

## 2. ASY/SYM 指数

2019年3-4月のASY/SYM指数を算出し、ホームページに載せました。

<http://wdc.kugi.kyoto-u.ac.jp/aeasy/index-j.html>

## 3. 界科学データシステム・アジアオセアニア会議 2019 (北京)報告

5月7日と8日の両日、北京市内北部のオリンピック記念公園近くにある中国科学院地理科学与資源研究所 (IGSNRR, CAS: Institute of Geographic Sciences and Natural Resources Research, Chinese Academy of Science)で、世界科学データシステム・アジアオセアニア会議 2019 (World Data System Asia-Oceania Conference 2019) が開催されました。これは、一昨年、ICSU/WDS と地磁気センターが主催し、NICT, ISEE, SGPSS および CAS/IRSDE が共催して京都大学益川ホールで開催しました世界科学データシステム・アジアオセアニア会議 2017 で芽生えたネットワークとデータ活動に関する交流を継続・発展させることを目的としています。今回の参加者は、14ヶ国から計120人でした。



<集合写真>

初日は、IGSNRR 所長の X. Liao 氏、CAS の S. Wang 氏などからの挨拶に続き、WDS SC (Scientific Committee) 委員長の Sandy Harrison と National Science & Technology Infrastructure Center of China の Lei Shi 氏による基調講演があり、そのあと、翌日夕刻まで、以下の 6 つのセッションとポスター展示がありました。

- (1) International collaboration on data
- (2) Data for geophysics and space science
- (3) Development of data-sharing system
- (4) Marine and polar data
- (5) Data processing and evaluation
- (6) WDS forum

プログラムの詳細は、

<http://www.wds-china.org/static/fixed/WDS-AO-2019-Programme.pdf>

をご参照願います。(プログラムには first name がイニシャルしか書かれていないので、Li さんや Wang さんが大勢おられてわかりにくいですが、アブストラクトにはフルネームが書かれていますので、そちらをご参照願います。)



<会議場内>

全体としては、地球科学や地理、天文の分野の講演が主で、文科系のデータについての発表はほとんどありませんでした。WDS はあらゆる学問分野を対象としていますので、この点、次回の会議ではセッションの構成と会議の案内で改善・努力する必要があると思われます。また、会議終了後も、この会議で形成された人的ネットワークを、アジア・オセアニア地域のデータネットワーク発展につなげる努力の継続が必要だという認識も共有されました。

私自身は、一昨年 11 月に設立された京都大学アカデミックデータ・イノベーションユニット(通称・葛(くず)ユニット)が、昨年末から今年の 1 月にかけて京都大学内の全研究者に対して実施しましたアンケート調査結果の報告を行いました。この調査の目的は、学内のどこに、あるいは誰がどのようなデータベース、あるいはデータセットを持っているか、また、公開/非公開の状況、問題点などを明らかにし、最近その必要性の認識が広まりつつあるデータマネジメントシステムを全学的に構築するためのプランを提案するための基礎的情報を得ることにあります。少なくとも今回の参加者が知っている範囲では、このような調査が大学全体で実施された例はないようで、興味を持っていただけたようでした。

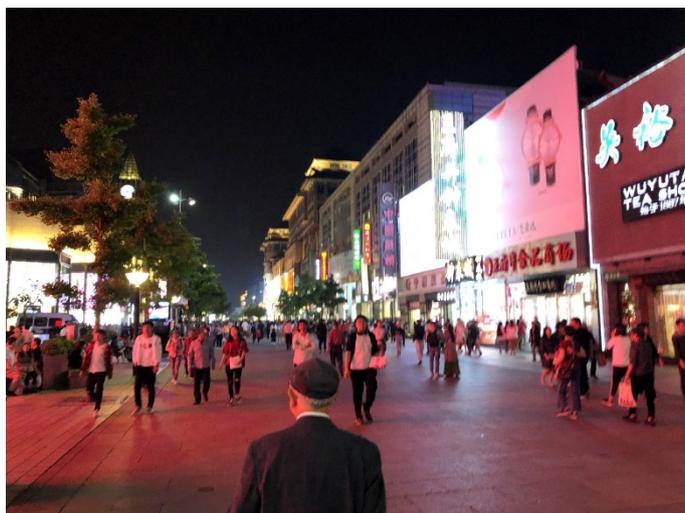


<WDS SC 会議出席者>

会議の翌日からは、2日間、朝から晩まで、WDS SC の face-to-face meeting が、会場に隣接する新しい建物の中でありました。そこでは、自然科学系の ICSU(国際科学会議)と文科系の ISSC(国際社会科学評議会)が昨年7月に統合され、ISC(国際学術会議)になったことに伴い、新たに提案されているISCの基本方針に対し、WDSとしてどのように対応するかということを中心に、今後の活動方針などが議論されました。

会議終了日の10日夜は、東京並みに張り巡らされた地下鉄網(ただし路線がほぼ東西方向と南北方向に走っていて、東京のように複雑に曲がっていない点が大きく異なる。また、改札口ではX線の荷物検査を受けなければならない。)に乗って、10数年ぶりに天安門近くの繁華街、王府井(ワンフーチン)に行ってみました。

前回来たときは、夜店が路上にぎっしりと並び、騒々しく行き交う人々で混雑する中、私は強力な磁力で空中に浮遊して回転するコマを土産に買って帰りましたが、今はそのような夜店は一軒もなく、広い歩行者天国となり、道の両側にはデパートや土産物店、有名ブランド店などのビルが並ぶ普通の観光地になっていて、私にとっては、やや期待はすれの場所になっていました。



<金曜日の夜の王府井>

(家森 俊彦 — 前センター長)

#### 4. センターの「地磁気とは？」のホームページ

5月9日の朝日新聞朝刊の科学欄における解説「北磁極の動き 謎の加速」でセンターのホームページが紹介されました。同様の内容は朝日新聞デジタルの以下のサイトにも掲載されています。

<https://www.asahi.com/articles/ASM5840WDM58ULBJ008.html>

図はそのファーストビューです。

朝日新聞デジタル > 記事

社会

その他・話題

サイエンス

### 「一線を越えた」北磁極の怪、スマホはどうなる？

有料記事

勝田敏彦 2019年5月9日09時55分

シェア

0

ツイート

list

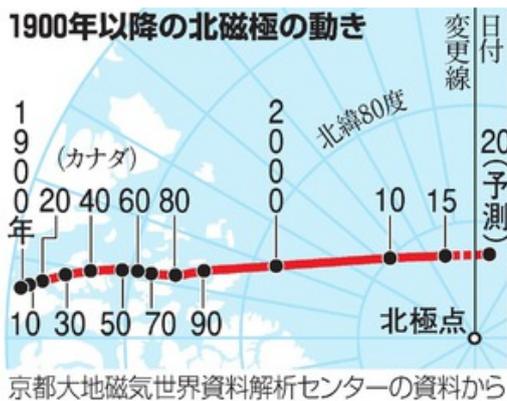
ブックマーク

1

スクラップ

メール

印刷



地球のてっぺんで「異変」が起きている。主役はコンパスが指す北極、「北磁極」。移動速度が速くなって地磁気の専門家を悩ませている。多くのスマートフォンには地磁気センサーが入っているが、私たちも悩む必要があるのだろうか。

独自の言葉で会話始めたAI 「新たな生命」すぐそこに

地球は巨大な磁石であり、磁場の向きは方位磁針でわかる。針が示す「北」である北磁極は北極点とは位置が違い、常に移動している。

加速したのは20世紀後半からだ。それまで年に10キロほどだったペースが、2000年ごろには約50キロになった。北磁極はもともとカナダ北部に位置していたが、1

(田口 聡・小田木 洋子)

#### 5. 人事異動

竹田 雅彦 助教：3月31日付で退職